

# 「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」

阿 部 二 郎

## 1 はじめに

「AはBである」というコピュラ的關係にあるもの「A」と「B」が、より大きな文の成分として現れた形式として以下のようなものがある。

- (1) みんながこれを吉報だと思った。
- (2) みんながこれを吉報と思った。（『山本五十六』阿川弘之）

両者はそれぞれ「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」の形式をしており、形態的には「ダ」という形式の有無という点で違っている。

本研究の目的はこの二つの文が同じ文であるのか、それとも異なる文であるのかということについて明らかにすることである。両文が同じものであるか否かが明らかになることにどのような意義があるのかという点については後述する。なお、ここで「同じ文」と呼んでいるものは「意味的・統語的に等しい文」と定義する。

まず両者の意味的な側面について考えてみると、(1)と(2)はほぼ同じ意味の文であると考えてよいと思われる。すなわち、いずれの文においても「これ」および「吉報」は「これは吉報だ」というコピュラ的な意味関係にあり、文全体では主体（「みんな」）がそのように「思った」という意味となっている<sup>1</sup>。

ではこれらの文は統語的にも同じ構造を有していると思なしていいであろうか、それとも意味的には同等でありながら統語的には異なった構造の文と見なすべきであろうか。以下では、これらが同じ構造を有しているとする先行研究と、これらがそれぞれ異なった構造を有していることを示唆する先行研究について順に見ていき、これらをふまえた上で「AヲBダト思ウ」という形式と「AヲBト思ウ」という形式の差異の有無について考察していく。

## 2 先行研究とその検討

### 2.1 両者を同じものと見なす立場

三上（1953）は以下のような文を例として挙げ、これらが「ゼロ記号」を用いること

で統一的に捉えることができると記述している<sup>2</sup>。

- (3) 反動思想ダ」トシカ思ワレナイ
- (4) 反動思想」トシカ思ワレナイ

これはつまり、(4) 文にもたとえば以下のように「ダ」に相当する見えない何らかの成分 ( $\phi$ ) が存在すると考えれば、両者を同じものと見なすことができるという記述である。

- (4) 反動思想  $\phi$ 」トシカ思ワレナイ

つぎに、Kitagawa (1985) は以下のような文をとりあげ、補文節内の「だ」は音形的に空でありながらコピュラとしての解釈を残している (ibid. p.214)、としている。

- (5) a. [お前を男 (だ) と] 見込んで頼みがある。
- b. [わしを大岡越前 (だ) と] 知っての狼藉か。

つまり「お前を男と見込んで…」という文は、実際は「お前を男  $\phi$  と見込んで…」の  $\phi$  の位置に音形的に空のコピュラが存在しているという記述である。

そこでまず、この二つの先行研究をふまえて、次の仮説をたてる。

- (6) 仮説：「A ヲ B ト思ウ」という形式は「A ヲ B ダト思ウ」から「ダ」を省略したものである。

ここで「ダ」の省略という考えを提示したが、省略した文中要素はいつでも復元可能であるから、省略する前と省略した後の文は同じ文と見なすことができる。同じ文に対する何らかの操作はどちらにも等しく適用できるはずである。つまり (6) の仮説が正しければ「A ヲ B ダト思ウ」にたいする何らかの操作は「A ヲ B ト思ウ」にも適用できると予測される。そこで両文中の「を」を「が」に置き換えて観察してみる。

- (7) (みんなは) これが吉報だと思った。
- (8) \* (みんなは) これが吉報と思った。

(7) が文法的に適切であるのに対し (8) が非文法的になってしまうのは予測と矛盾する。したがって (6) の仮説は誤りであり、「A ヲ B ト思ウ」という形式は「A ヲ B ダト思ウ」から「ダ」を省略したものとは考えられない、つまり両者は統語的に見て異なる文であるということが帰結される。では両者はどのように違うのであろうか。

## 2.2 両者を区別する立場

森山 (1988) は「AヲBダト思ウ」および「AヲBト思ウ」の他に「AハBダト思ウ」の三形式を扱っており、前二者は後者における「引用の格成分が、引用成分の中から抽出される場合」(ibid. p.80) であるとして、この現象を「引用成分の繰り出し」と呼んでいる。すなわち、この三者の関係は以下のような図式で捉えられている<sup>3</sup>。

### (9) 引用成分の繰り出し (ibid. p.80)

|               |         |
|---------------|---------|
| Xガ 「Aハ Bダ」ト思ウ | 引用型     |
| ↓             |         |
| Xガ Aヲ 「Bダ」ト思ウ | 引用繰り出し型 |
| ↓             |         |
| Xガ Aヲ Bト思ウ    | 同定型     |

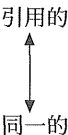
先に見た三上 (1953)、Kitagawa (1985) に対して、森山 (1988) は「AヲBダト思ウ」を「引用繰り出し型」、「AヲBト思ウ」を「同定型」と呼んで区別しているという点において前者とは一線を画している<sup>4</sup>。

この「引用繰り出し型」と「同定型」について、森山 (1988) は「と」という形式の持つ意味からそれぞれ記述している。まず、そこに挙げられている「と」の意味について見てみる。

### (10) ト格の意味 (ibid. p.76)

- 同一的なト：ガ格ないしヲ格に準ずる格と外延的な同一性の関係が成立する格。(例：太郎が学生となる)
- 引用的なト：典型的には伝達・思考などの引用的動詞に共起し、統語論的なレベルを異にし、意味的制約のない引用成分をなす。  
(例：「あ」と言う)
- 相互的なト：トで取り上げられる格があい方を表し、ガ格ないしヲ格に準ずる格と論理的には交替が可能。(例：太郎と花子が結婚する)

つぎに森山は意味的な観点から見て、「同一的なト格」が「引用的なト格」に連用修飾のトを介して連続している、としている (ibid. p.74)。これは次のような図式によってまとめられる。

|               |          |   |
|---------------|----------|---|
| (11) 「おい」と言う。 | 引用       |  |
| 「おはよう」と入ってくる。 | 引用的な連用修飾 |   |
| がっちりとする。      | 結果の連用修飾  |   |
| 刀となる。         | 同一的なト格   |   |

森山 (1988) は「と」は (10) のように意味分類できるものの、実際は (11) のような意味の連続性があり、それが (9) で見た三構文の連続しつつも微妙に違う意味を生み出している、と見ているようである。しかし、「引用繰り出し型」と「同定型」に関する森山の以下の記述は、両者の違いを明確に表しているとは言い難い。

- (12) 「引用繰り出し型」に関する記述（下線は筆者）  
引用成分の主語のヲ格による判断対象の繰り出しでは、終助詞が分化するような直接的引用は出来ず<sup>5</sup>、引用という扱いが適当かどうか検討する必要があるかもしれない。同一的なト格に近くなる。 (ibid. p.84)
- (13) 「同定型」に関する記述（下線は筆者）  
同定型では、ト格の意味は、引用と言うべきか同定の「と」と言うべきか、  
微妙な境界上にある。 (ibid. p.80)

つまり、どちらの「と」も「同一的なト格」と呼ばれるものに近い、とされているだけで両者の具体的な違いについては言及されていない<sup>6</sup>。

以上本節で取り上げた先行研究を検討した結果をまとめると、次のようになる。まず、三上 (1953)、Kitagawa (1985) の分析とは異なり「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」は全く同じ文ではなく、表面的な形態以上の違いがあると思われる。意味の面では、三上 (1953)、Kitagawa (1985)、森山 (1988) も示唆するように、両者ともにコンピュータ（同定）的解釈がある点で共通している。森山 (1988) の「と」の意味に基づいた記述からは両者の違いが未だ明らかになっていない。

### 3 「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」の構造

#### 3.1 格付与に基づくモデル

竹沢 (1998) は (1)・(2) とよく似た次のような現象を扱っている。

- (14) a. 太郎は花子の大学合格をととても羨ましいと思っている (らしい)。  
b. 太郎は花子の大学合格をととても羨ましく思っている (らしい)。

これらはいずれも「花子の大学合格が羨ましい」という関係にある「花子の大学合格」と「羨ましい」がより大きな文の成分として現れており、文全体としては「太郎」がそのように「思っている」という意味になっている。これは「AヲBダト思ウ」および「AヲBト思ウ」とよく似た意味関係である。益岡 (1987) は (14) や (1)・(2) のような構文を「認識動詞構文」と呼んで並行的に扱っており、このことも両構文の関連性を示唆している<sup>7</sup>。

意味的側面以外についても (14) は (1)・(2) と共通点を持っている。すなわち (14) は「を」を「が」に置き換えられるか否かという点において (1)・(2) と同じ振る舞いをする。

- (15) a. 太郎は花子の大学合格がとても羨ましいと思っている (らしい)。  
 b. \* 太郎は花子の大学合格がとても羨ましく思っている (らしい)。  
 (16) a. これが吉報だと思った。 (= (7))  
 b. \*これが吉報と思った。 (= (8))

本研究では (14) と (1)・(2) の共通点に着目して竹沢 (1998) の (14) に対する説明が (1) と (2) の違いに援用できないか検討する。そこでまず、竹沢 (1998) の説明を概観する。竹沢 (1998) は格付与に関して四つの作業仮説を立てており、これに基づいて (14) の構造を説明している。すなわちその作業仮説とは——(1) 主格ガは時制(テンス)辞によって付与される。(2) 対格ヲは動詞によって付与される。(3) 時制節は節の外からの格付与に関して「不透明」であり、格付与は節の中で行わなければならない。(4) 非時制節は節の外からの格付与に関して「透明」であり、節の外からも格付与できる。——というようにまとめられる。(14) において格付与が実際どのように行われているかを表すと次のようになる。

- (17) a. 太郎は [時制節 花子の大学合格 が とても羨ましいと] 思っている。  
 b. 太郎は [非時制節 花子の大学合格 を とても羨ましく] 思っている。
- 

(17)a では「羨ましい」が時制を持っているのでこれが「花子の大学合格」に主格ガを付与している。また時制節は節の外から格付与できないので「思っている」が「花子の大学合格」に対格ヲを付与することはできない。一方 (17)b は「羨ましく」が時制を持っていないので「花子の大学合格」に主格ガが付与されることはない。また非時制節は節の外から格付与できるので「思っている」が「花子の大学合格」に対格ヲを付与する。しかし、ここで次のような例外が生ずる。

- (18) 太郎は [時制節 花子の大学合格 を とても羨ましいと] 思っている。

(18) は「羨ましい」に時制があるが「花子の大学合格」に主格ガが付与されず、格付与に不透明な時制節の外から「思っている」が対格ヲを付与しているように見える。竹沢 (1998) はこれを次のように説明している。

- (19) 太郎は [ $\alpha$  花子の大学合格 を [時制節 pro<sup>s</sup> とても羨ましいと]] 思っている。
-

(19) では「花子の大学合格」と埋め込み時制節との間に主述関係があり、これが何らかの節 $\alpha$ を構成している<sup>9</sup>。節 $\alpha$ が節外からの格付与に対して「透明」であると仮定すれば、「思っている」が「花子の大学合格」に対格ヲを付与していると説明できる。一方埋め込み節内では pro が時制辞から主格を付与されていると考えられている。

まとめると、(14) は a・b とも主節動詞「思っている」が対格ヲの付与子となっているが、a では埋め込み節の時制が pro に主格ガを付与しているのに対し、b では埋め込み節内での主格ガ付与は起こっていないということになる。

竹沢 (1998) は埋め込まれた節が形容詞述語文である場合を研究対象としている。本研究の対象である (1) と (2) は埋め込み節が名詞述語文であるため<sup>10</sup>、これをそのまま竹沢 (1998) の説に当てはめることはできない。これは竹沢の分析において形容詞の活用形態と時制の関係が問題の焦点となっているからである。そこでつぎのような仮説をたてることによって竹沢の論を援用できないか試みる。

- (20) 仮説：(1) の埋め込み節は時制節であり、(2) の埋め込み節は非時制節である。
- (1) [これを 吉報だと] 思った。
- (2) [これを 吉報と] 思った。

このような仮説を立てる根拠は次のような現象にある。

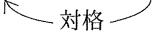
- (21) 太郎は花子がかつて女優だと思っている (らしい)。  
(22) \* 太郎は花子がかつて女優だと思っている (らしい)。  
(23) 太郎は花子をかつて女優だと思っている (らしい)。  
(24) \* 太郎は花子をかつて女優だと思っている (らしい)。  
(25) \* 太郎は花子をかつて女優と知っている (らしい)。

(21) が適格で (22) が非文法的となることは埋め込み節内で「かつて」と「-だった」が呼応していることを示している。(23)・(24) でもこれと同じことが観察される。ところが (25) では「かつて」と呼応する時制形態がなく、非文法的になってしまう。このことは (25) に音形を持つか否かにかかわらず時制辞が存在しないことを示唆している。

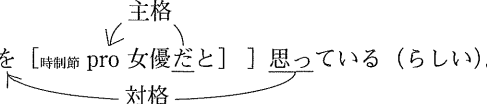
そこで (20) の仮説より、竹沢 (1998) の分析を「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」にも適用して観察する。

- (26) 太郎は [時制節 花子 <sup>主格</sup> が 女優だ と] 思っている (らしい)。

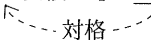
(26) では「花子が女優だ」は時制節であるので、「花子」には時制辞から主格ガが与えられる。

(27) 太郎は [非時制節 花子を女優と]—思っている (らしい)。  


一方 (27) の「女優と」は仮説に従えば時制がないので「花子」は埋め込み節内で主格ガを与えられることはない。そして非時制節は節外からの格付与に対して「透明」であるため「思っている」が「花子」に対格ヲを付与していると考えることができる。

(28) 太郎は [ $\alpha$ 花子を [時制節 pro 女優だと] ] 思っている (らしい)。  


(28) は (19) と同じように埋め込み節が時制を持っていながらこれが「花子」に主格ガを付与せず、節外から対格ヲが付与されている例である。竹沢 (1998) の分析に従えば、「花子」と埋め込み時制節との間に主述関係があり、これが何らかの節 $\alpha$ を構成しているという構造として捉えられる。埋め込み節の時制は pro に主格を付与し、 $\alpha$ は節外からの格付与に対して透明であるため、「花子」には「思っている」が対格ヲを付与するということになる。

(29) \* 太郎は [非時制節 花子が女優と]—思っている (らしい)。  


また (29) は「女優と」に時制がない、つまり主格の付与子がないにもかかわらず「花子」に主格ガが付与されていて、また非時制節であるのに「思っている」から対格ヲを付与されていない。つまり「花子」に対する主格ガの付与が不可能な構造であるにもかかわらず対格ヲではなく主格ガが現れているのでこれは不適格な文となる。

以上の観察の結果、竹沢 (1998) のたてた作業仮説から (1)・(2) および (7) の文法性と (8) の非文法性を的確に予想することが出来た。ここから仮説 (20) は妥当であることが検証された。しかし、竹沢 (1998) の分析には全く問題がないわけではない。それは「節 $\alpha$ 」とはいったい何であるかということである。次節ではこれについて若干の考察をする。

### 3.2 格付与モデルの問題点とモデルの修正

竹沢 (1998) のモデルは基本的になんらかの埋め込み節を想定している。それを援用した 3.1 節のモデルも「AヲB(ダ)ト思ウ」の「AヲB(ダ)ト」は埋め込み節を構成しているということになる。しかし、Kuno (1976) は、「AヲBダト思ウ」において「Aヲ」は埋め込み節内要素ではなく主節要素であると主張している<sup>11</sup>。とりわけ、埋め込み節内に位置するとは考えられない要素が「Aヲ」と「Bダ」の間に現れる次のよ

うな例 (ibid. p.25) は、その証拠として十分な効力があると思われる。

- (30) a. 山田は愚かにも [田中が天才だ] と思っていた。  
b. \*山田は [田中が愚かにも天才だ] と思っていた。  
c. 山田は田中を愚かにも天才だと思っていた。

(30)aの「愚かにも」は「田中が天才だ」という節の外にありこの文は適格であるが、bのように「田中が天才だ」の中に挿入すると非文法的となる。ところがcのように「田中を」と「天才だ」の間に挿入した場合は適格となる。これは「田中を」と「天才だ」が節を構成していないことを示唆している。

阿部忍 (1991) は「AヲBダト思ウ」において「Aヲ」は埋め込み節内でも主節でもなく、次のように主節動詞を含んだ構成素である動詞句にあると主張している<sup>12</sup>。

- (31) 太郎は [VP 花子<sub>i</sub>を [V [埋め込み節<sub>i</sub> 天才だと] 思っ]] ている。

これは (19) に見た構造と一部似ている。

- (32) 太郎は [ $\alpha$  花子の大学合格を [時制節 pro とても羨ましいと]]-思っている。  
(= (19))

すなわちその類似点とは「Aヲ」と埋め込み節に階層差があるという点である。違いは後者が「Aヲ」を埋め込み節の中に想定しているのに対し、前者は埋め込み節の外に想定している点である。

そこで Kuno (1976) の「Aヲ」を埋め込み節の外に位置づける分析をふまえて、阿部忍 (1991) の分析を援用することで先ほどのモデルを修正する。その結果「AヲBダト思ウ」の構造は以下ようになる。

- (33) 太郎は [動詞句 花子を [V [時制節 pro 女優だと] 思っ]] ている (らしい)。

つまり「Aヲ」を埋め込み節内の要素と捉えるのではなく、動詞句という構成素内の要素として捉えるという分析である。直観的に言えば「Aヲ」と「Bダト」は同一節内要素であるというほど統語的に密接な関係にはないが、同じ構成素を構成しているという程度には関係性を持っているということになる。なお「V」は動詞句内部に存在する中間的な構成素<sup>13</sup>と考える。

節と違って動詞句内には自由に副詞的修飾成分を挿入することが可能である。

- (34) a. 太郎は愚かにも [動詞句 自分の給料を競馬に使っ] てしまった。  
b. 太郎は [動詞句 自分の給料を愚かにも競馬に使っ] てしまった。



つまり (30)c で見た「Aヲ愚かにもBダト思ウ」は (34)b と同様の構造として捉えることができる。

このように考えることによって、「節 $\alpha$ 」といったものを新たに仮定しなくとも説明することが可能となり、また修飾成分の挿入についても矛盾無く説明できる。

### 3.3 統語的に見た「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」の違い

統語的観点から分析した結果、「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」の違いは、時制辞の有無という基準から説明することが可能となった。

冒頭で述べた、両者の違いを明らかにする意義とは次のようなものである。すなわちこれによって「AヲBダト思ウ」における「名詞十ダト」と「AヲBト思ウ」における「名詞十ト」の違いと、形容詞の終止形と連用形の違いとを、時制という同一の基準にもとづいて次のように並行的に捉えることが可能となる。

(35) N：名詞、A：形容詞

|           |     |
|-----------|-----|
| 「NヲNダト思ウ」 | ＋時制 |
| 「NヲNト思ウ」  | －時制 |
| 「NヲAト思ウ」  | ＋時制 |
| 「NヲA-ク思ウ」 | －時制 |

また格付与のメカニズムについても、埋め込み節が名詞節の場合と形容詞節の場合とで全くパラレルに捉えることができるようになった。

### 4 意味・機能的観点から見た「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」

2.2節の(9)に見たように、「AヲBト思ウ」に対して森山(1988)は「同定型」という名称を与えている。直観的に見ても森山の(13)の指摘通り、「AヲBト思ウ」には同定的な解釈がある。

「AヲBダト思ウ」におけるコピュラの役割は「ダ」が担っていると考えて問題ないであろう。しかし「AヲBト思ウ」は、これまでも見てきたように「ダ」が省略されているとは考えられない。では「AヲBト思ウ」におけるコピュラの役割はいったい何が担っているのであろうか。

ここで再び森山(1988)の「ト」の意味・機能に関する分析に立ち返ってみると、この場合のコピュラは「ト」が担っていると考えることができる。すなわち「AヲBト思ウ」における「ト」は森山(1988)の言う「同一のト」であると考えられる。

このことと3節に見た統語的考察を総合的に考えると、「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」の違いは次のように捉えられる。

(36) a. 「AヲBダト思ウ」:

埋め込み節は時制節であり、「ダ」はコピュラ、「ト」は(引用)節マーカである。

b. 「AヲBト思ウ」:

埋め込み節は非時制節であり、「ト」は引用節マーカではなくコピュラ相当である。

## 5 まとめと展望

本研究では「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」という形式について考察した。考察の結果、両者は「ダ」の省略を介した同じ文とは考えられず、その違いは埋め込み節の時制の有無という観点から説明されることを格付与のモデルを用いて検証した。また、このことから両者の違いは形容詞節が埋め込まれた文における形容詞述語の終止形+「ト」と連用形にそれぞれ対応づけて考えられることが分かった。統語的な考察の結果を踏まえた上で意味的な側面に目を向けた場合、両者は「ト」の意味・機能という面でも異なっていることが明らかとなった。

3.2節では「AヲBダト思ウ」の「Aヲ」を節内要素ではなく動詞句内要素として扱ったが、これは「AガBダト思ウ」という構文との関係を考慮すると問題がある。両者は意味的にほぼ同じであるにもかかわらず、前者は動詞が「Aヲ」を項として選択しているのに対し、後者は節だけを選択している。この問題については阿部忍(1991)、三原(1994)、竹沢(1998)など多くの議論があり、一般的に同じ動詞で項の数が増えることは好ましくないとされている<sup>14</sup>。これについては「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」の比較というテーマの範囲を越えるためここでは扱わなかった。今後は「AヲBダト思ウ」・「AヲBト思ウ」と「AガBダト思ウ」の関係を視野に入れたさらに発展的な研究を課題としたい。

### <注>

- 1 藤田(1989)は「XヲYト考エル」という構文について「[XガYデアル」という主辞-賓辞の意味関係に立つことになる二項X・Yを、ヲ格と引用句で分析的に示すもの」(ibid. p.47)と記述している。
- 2 厳密に見れば三上の例は「(Aガ)Bダト思ワレル」と「(Aガ)Bト思ワレル」のように「-レル」が付加して態の変化したものであるが、焦点は本稿と同じく「ダ」の有無にあり、態の別は問題とならないと判断されるため、能動文と同様に扱った。
- 3 森山(1988)の表記では「Aガ[BハCダ]ト思ウ」のようにになっているが、説明の便宜上本稿にあわせて「Xガ[AハBダ]ト思ウ」のように改めた。
- 4 「繰り出しによって、それぞれ、意味的な違いができる」(森山1988, ibid. p.80)
- 5 ??彼(のこ)を「馬鹿だなあ」と思う。(森山1988, p.84)
- 6 用語を厳密に見た場合「同定の『と』」と「同一的なト格」が同一のものを指しているのかがはっきりしないという問題がある。しかし「ト格の意味」に「同定の『と』」が挙げられていないこと、「同一のト」の定義(10)が同定の定義としても捉えられることの二点から、ここでは両者を同じものとして

扱った。

- 7 ただし益岡（1987）は (14)b のような連用語（形容詞／形容動詞連用形）をとる構文の方が (1) や (14)a のような引用語（「と」）をとる構文よりも「相対的に自発性・感覚性の高い表現となる」（ibid. p.155）と意味的に若干の違いが生じることを指摘している。
- 8 竹沢（1998）では、pro は「音声的にゼロの代名詞」（ibid. p.58）とされている。
- 9 竹沢（1998）は (19) のようにヲとガに階層差を設ける根拠を以下の例で示している。
  - a. 太郎は 花子を 性格が悪いと思っている（らしい）。
  - b. \*太郎は 花子が 性格を 悪いと思っている（らしい）。これは、先行名詞句が主文動詞によって、また後続名詞句が補文の時制辞によって、それぞれ対格と主格を与えられていることを示している。（ibid. p.57）
- 10 本稿は「A ヲ B ダト思ウ」の B が名詞句であるものを研究対象としているが、同様の分析は B が形容動詞語幹であるものについても応用できると思われる。しかし、紙幅の関係上ここでは示唆にとどめて形容動詞については別稿で検討したい。
- 11 Kuno（1976）は深層構造においては「A ヲ」は埋め込み節内にあり、後に主節へ移動するという分析をとっている。結果として「A ヲ」は節外にあることになる。
- 12 (31) の「VP」は動詞句、「V<sup>I</sup>」は埋め込み節と動詞がなす中間的な構成素を表している。阿部忍（1991）は埋め込み節内から節外へ「花子を」が「移動」したという分析をとっており、節内にある「t」はその移動の痕跡を表している。一方竹沢（1998）は「移動」を考慮していない。本稿では「移動」を考慮しない分析をとる。「移動」の有無に関する問題は本稿の分析の焦点、および紙幅を考慮した上で別稿に譲りたい。
- 13 阿部忍（1991）は埋め込み節のほうが「A ヲ」よりも主節動詞との結びつきが強い、として埋め込み節と動詞がなす中間的な構成素 V<sup>I</sup> を想定している。詳細については阿部忍（ibid.）を参照のこと。
- 14 竹沢（1998）が「 $\alpha$  節」をたてて、「A ヲ」を節内に位置づけようとするのも、ここに理由がある。

## 参考文献

- 阿部 忍. 1991. 「認識動詞構文の構造と格」『待兼山論叢』25. 大阪大学文学部.
- 藤田保幸. 1989. 「『名づける』『呼ぶ・いう』の引用論（一）」『詞林』5. 大阪大学古代中世文学研究会.
- Kitagawa, Yoshihisa. 1985. Small but Clausal. *CLS 21. Papers from the General Session at the Twenty-First Regional Meeting*. Chicago, Illinois.
- Kuno, Susumu. 1976. Subject Raising. *Syntax and Semantics 5: Japanese generative grammar, ed. Masayoshi Shibatani*. New York: Academic Press.
- 三原健一. 1994. 『日本語の統語構造』松柏社.
- 三上 章. 1953. 『現代語法序説』刀江書院.
- 益岡隆志. 1987. 『命題の文法』くろしお出版.
- 森山卓郎. 1988. 『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
- 竹沢幸一. 1998. 「格の役割と構造」中右実（編）『日英語比較選書』9巻. 『格と語順と統語構造』研究社出版.

（あべ じろう 筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科 応用言語学）